

【 2 】

| | |
|---------|-------------------------|
| 氏 名 | 植 野 修 司 うえ の しゅう じ |
| 学位の種類 | 文 学 博 士 |
| 学位記番号 | 論 文 博 第 21 号 |
| 学位授与の日付 | 昭 和 42 年 1 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当 |
| 学位論文題目 | ロシヤ諸年代記に於ける「過ぎし年月の物語」研究 |

論文調査委員 (主査) 教授 泉井久之助 教授 井上智勇 教授 松平千秋

論 文 内 容 の 要 旨

ロシアの諸年代記の中にみられる「過ぎし年月の物語」が、1037年に書きはじめられたものを骨組みにしていたとすれば、文字を持たなかったそれ以前の出来事の記事は、多く口頭伝承に由来するものであったと思われる。本論文の(1)項においては、「過ぎし年月の物語」の中に投影せられた1037年頃及びそれ以前の遙かに遠い口頭伝承の正体をたずねた。(2)項においては、年代記者(たち)にその伝承を語り聞かせた人物が存在したことを実証し、その内の一人ヤンという人物について述べ、(3)項において彼が伝えたと思われるものを多くの記事の内から拾い出してヤンの父親にまでさかのぼり、ヤンが伝えた伝承の正体を把握するにつとめた。そしてヤンの伝えたものの一つが支配階級の武人たちの伝承であったことをたしかめ、(4)項においては、「過ぎし年月の物語」に投影せられるそれ以外の伝承、即ち、地方庶民的な伝承の跡をたずね、その論証は主として現代に残るブリーナとの比較によって行なわれた。(5)項においては、具体的な例を取りあげつつ「過ぎし年月の物語」の記事を検討し、これを伝えたヤンが、如何なる姿勢で、如何なる気概を込め、如何なる目的でそれらを伝え、他方、これを聞いて年代記に書き込んだ年代記者の受けとめ方がどんなものであったかを確かめた。同時に12世紀初頭にも識りの人々が語っていた昔話もまた「過ぎし年月の物語」の中に反映していることを明らかにし、ヤンの伝えたものとは、その物語性の成長度(合理化の程度)の異なることを示し、その由来をたずねた。

「過ぎし年月の物語」がその記事の素材とした源は、以上の他に、親兵団が持っていた英雄叙事詩があったことをさぐり、「物語」に保有されるこの叙事詩にその鮮やかな特性のあらわれていることを説いた。(6)項である。而もその特性が年代記者の持つ傾向と時に一致し、説得の手段として利用せられたことを多くの記事から確め得た。(7)項がそれである。(8)項においては、以上のように各種の口頭伝承をささえた文字以前の「古代ロシア語」の姿をたずねた。年代記の記述という文章語への展開が、例えば使者の口上による伝達表現や会議における発言のように高度に様式化され或るいは周到に配慮せられた言語使用からも道をひらかれたことを例証したのである。一方、(9)項においては、庶民の持つ諺が、そのまま記事と

して解説的に使用せられたことを示し、あわせて、庶民の発想になる言い廻しが、どの様に利用せられ、どのように文字以前の口頭古代ロシア語の文語としての表現力を柔軟ならしめつつ進化せしめ、「過ぎし年月の物語」のなかに如何に、投影していたかを考え、以上のことを総合して(10)項では、「過ぎし年月の物語」は、その大半が各種各様の口頭伝承からなるモザイクであることを説き、そしてそのモザイクの編集態度とその手腕を検討した。

一方、「過ぎし年月の物語」にはその記事の源とした他の部分即ち、文書的な資料の内、条約文の古い写しなどがあることを明らかにし、ビザンチンから持ち込まれた輸入文献の跡をたどって、(11)項に納め、ロシアの初期文献がここに如何ように織り込まれたかをたずねた。(12)項ではそれぞれの文献的な源を編集する際に、「物語」としての統一性がほころびた跡を指摘し、ついでに、その他の文献の反映をも求めた。特にロシアでのキリスト僧の物語に及んで、「過ぎし年月の物語」が如何に寄木細工で、各記事に異質的なものが如何に錯綜しているかを実証した。こうして各記事間の矛盾は、統一への救いのないことを説き、しかもその矛盾をもかえり見ず、年代記者は一途に何を言おうとしたのであるかを、たずねたのである。

この様に多くの物語や文献のつぎはぎによって創られたもののうち最も典型的な部分が946年のオリガ女帝の記事であるとして、(13)項ではその実際の姿を分析して、ロシア文化史にとって一番重要なキリスト教撰取の物語も上の例にもれないことを示し、最初の年代記者ニコンの筆の跡を1061年の記事によって探り出し、その記事の由来を求め、更にこの際に各種のものを重ね合わす編集の手続を明らかにした。

(14)項では、「過ぎし年月の物語」中、文学的に最もドラマチックな記事を取りあげ、此処にみられる編集のほころびから、ここでもまとめられる以前の幾つかの個々の物語の存在をたしかめ、且つ、年代記者の宗教的主張の開陳をそのほころびの隙間に読み取ることに努め、年代記者の宗教的姿勢が如何なるものであり、その主張が世俗・政治面へどのように作用することを期待したかの点も此処から探り出そうとした。

(15)項に進んで、最古の台本(——現存しない——)の終末部が過ぎし年月の物語の何処にあったかを求めた。記述の要領と手法との相異を此処で全般にわたってたしかめつつ、度重なる加筆・添加・修飾の跡をたどったのである。そして、どの部分からが、古い当時の人々の実際の記録であるかをたしかめるにつとめた。勿論、古い台本によったと思われる部分の中にも、例えばその後の年代記者ニコンがみずからの実験体験によって書き入れた記事がある。

これらさまざまな伝承と記録の全体を年代記者が編集加筆し、或は年代記者に素材を提供した人々の姿勢と目的は、「過ぎし年月の物語」の記事自体を分析することによって解明することができる。父祖の辛勞による栄光建設をつぎ、内紛をやめ、外敵に向ってみずからを統一し、ロシアの正教の理念によった生活をかためようとする主張のために、その目的に添うように記事が組み替えられ、その目的に添うように書きかえられ、或は、その目的に添うものだけが拾いあげられたことを、これまでの各項で示し、偏に歴史記録書として読み取られることの危険性を指摘した。

ニコンによって世俗の世界へ関係づけられた後の「過ぎし年月の物語」が、1088年以後の記事において、政治性を一層強め、支配者への批判書となったことを(16)項で指摘し、その変化が、物語の表現に

レアリスティックな性格を与え、これがより古い年代の記事の再編集にも影響したことを述べた。年代記におけるリアリズムの発端の一つが此処に求められる。同時にこの政治性のゆえに外敵への防衛意識の発揚、民族意識の高揚がこの頃に年代記に更めて加味されたことが注目される。悪者への批判もまたこの頃の加筆と編集によって強められ、反対に善者への同感と、良き古い人物の理想化が進められた。ために物語は一面において客観性、他面につよい主観性を帯びることになる。この改変を決定的にもたらした人がネストルであったことを確かめ、このネストルの文体の独自性を明らかにするにつとめた。続いて(17)項では、ネストルが再編加筆した部分を引き出し、「過ぎし年月の物語」中で彼の主観によって編集整理された部分を検討し、特にルシ(Pycb)という言葉の受け取り方に既にネストルの勝手な主観と主張があったことを詳しく(18)項において考え、再び物語の非歴史的な性格を述べた。

以上で、伝承による物語的部分、事実の記録的部分がどのような立場と主張で織りまぜられて「過ぎし年月の物語」を形成したかについて述べ終り、続く(19)項では、年代記者(たち)による解説・説明或は正当化の文章をとりあげた。その様な文章にも統一性のないことが指摘され、各加筆編集者を通じての共通的な主張が抽出せられ、(20)項では全体を総合して、「過ぎし年月の物語」とは、国家の統一を念願としながらも、実際は統一のない分裂抗争の痛々しい物語にすぎないこと、「物語」自体が美化したごとき祖国の過ぎし栄光など無かったことを示した。むしろ、そのために過去の理想化がおこなわれ、史実でないものが書き加えられつつ、「物語」が成長していったことを調べた。そしてこの様な念願の書を創り出した年代記者たちの熱望と理念に、輸入キリスト教の思想がどの様に交り合っていたかを考え、(21)項では、この記述の理念と態度及び主張が、その後、永く、年代記文学の上に残映として残りつづけた跡を示したのである。

論文審査の結果の要旨

「これは、どこからルシ(Rusi)の国が出たか、誰がキーエフにおいて始めて君公として君臨したか、そしていつからルシの国が始まったかについての、過ぎし年月の物語である」と書きはじめられる冒頭の句からその名を得た「過ぎし年月の物語」(Povesti Vremennykh Lët)は、ロシアにおける建国事業のはじめと、これに続く数世紀に関する第一級の記事として、政治史・文化史・文学史あるいは言語史の上にきわめて重要な意味を持つに拘らず、これに対する立ち入った研究はロシア本国においても従来非常に少なかった。1768年に Tatiščev が「原初年代以来のロシア史」第1巻においてこれに触れて以来、今日に至るまで多少ともに重視すべき研究は大略50点に止まり、しかもその多くは「物語」の部分的な小研究論文であって専著と見做すべきものは10点に満たない有様であるのみならず、この10点もまた殆んどそのすべてが「物語」の外面史的な研究であった。ドイツの Trautmann の研究(1931)もまた多くその域を出るものではなかった。

これに鑑みて一応「物語」の内部に閉じこもり、これを内部より解きほぐして全体の構成的様相と、その組織にあずかる物語的各成分の相互関係並びに位層的区別を明らかにした後、再び統一的に考察を加えて「物語」がわれわれに与える豊富・多岐・分散、従って時に散漫であり矛盾しながらも時にまた厳粛且つ教訓的・鼓舞的な印象の来たる所以を理由づけ、かねて伝承の間における記述態度の変遷と各写本にお

ける異同の由来を闡明しようとして、而もそれを本論文において果し得たことは、着眼のユニークさと、これを遂行せしめたその研究的実力と成果において、わが国のみならず国際的にもロシア学における著者の大きい寄与とみとめることができる。

研究の内容は「論文要旨」に記載するごとくであり、著者はその各部分において成功しているのみならず、特に記述文体の異同を契機として「物語」に剖解を加えて行った各部分は、著者の古代ロシア語に対する造詣の程を示すものであって、高く推賞することができる。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。